

## 鹿児島県における温州みかん産地出水市の産地育成過程の分析とその特色ならびに今後の展望と問題点

四蔵 昭夫  
(鹿児島県果樹試験場)

SIKURA, A.

Satuma Orange Production in Izumi City, Kagoshima  
Prefecture and the Prospect of Future Problems

出水市は今後、鹿児島県における中核的温州地帯として囑望されている出水地域の枢要部を占め、その発展過程もすこぶる示唆に富んだものがあるので、今回本市を対象に、その産地形成過程の分析と問題点の摘出を企図した。

### I 現在に至る温州みかけ発展の経過

#### 1) 温州奨励地帯の選定と適地の面積

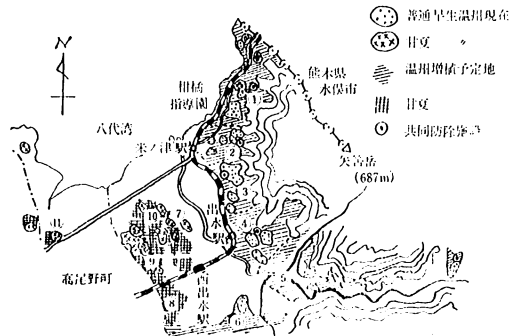
八笠岳山麓には昭和29年当時、12.2haの温州園が点在し、その生育状態からみて温州みかんの適地であることを立証していたが、農家の柑橘栽培への意欲が急速に高まったこともあり、市では、自然的立地条件が温州集團園の造成に好適していると同時に、地域内にすでに優良な温州成木園が点在している点も考慮して、昭和30年矢筈岳山麓一帯の適地を温州みかん奨励地帯に決定し、大々的な主産地形成に踏み切ったのである。

この地域内の適地面積は1,100ha、うち傾斜15度以下40%、15度以上60%となっている。

#### 2) 果樹園拡大計画の樹立と樹園地の増加

その後、市の意欲的な奨励施策により順調な面積の伸びを示したが、昭和37年3月、市が中心になり、甘夏も含めた総合的な果樹園拡大計画(第1図及び附表)をたて、更に組織的な面積拡大を図りつつあり、昭和

第1図 出水市における果樹園の拡大計画図  
昭和37年3月作成出水市



第1図の附表

種類	集団地名	地区番号	37年3月現在			拡大計画			計	計合
			ha	ha	ha	37年~42年	43年~46年	計		
温州	北部	1	32.9	57.1	33.0	90.1	123.0			
	中部	2	21.6	28.4	30.0	58.4	80.0			
	安原	3	16.0	22.0	24.0	46.0	62.0			
	愛宕	4	17.0	28.0	30.0	58.0	75.0			
	東部	5	11.0	12.8	10.2	23.0	34.0			
	武本東	6	4.2	5.8	11.0	16.8	21.0			
	上知識東	7	4.8	4.9	3.3	8.2	13.0			
集團地外			6.7	0.3	—	0.3	7.0			
小計			114.2	159.3	141.5	300.8	415.0			
甘夏	武本西	8	3.3	4.7	13.0	17.7	21.0			
	大野原	9	23.4	40.6	26.0	66.6	90.0			
	上知識西	10	14.1	27.4	32.5	59.9	74.0			
	荒崎	11	3.4	6.6	8.0	14.6	18.0			
	集團地外			2.8	0.2	—	0.2	3.0		
小計			47.0	79.5	79.5	159.0	206.0			
計			161.2	238.8	221.0	459.8	621.0			

39年現在、温州面積188haに遅している(第1,2表参照)。

第1表 年次別栽培面積

系統	年次	S.29	35	36	37	38	39	39年度面積比
普通	ha	10.4	45.5	82.0	86.0	102.2	116.0	普通
	1.8	20.5	32.2	45.0	52.0	72.0	61.7	早生
計		12.2	66.0	114.2	131.0	154.2	188.0	

第2表 昭、39年度柑橘類生産概況

種類	項目	栽培面積	生産量	販売量	商晶率	共販量	同左	県内
		ha	トン	トン	%	トン	トン	トン
普通温州	116	500	777.4	279.4	92.4	460.5	425.75	34.75
早生温州	72	341						
甘夏	60	340						

### II 産地航成過程の総合分析

#### 1) 産地育成上の促進ならびに抑制要因

現在までの過程で産地造成が順調に行なわれたのは、まず現地の実情が零細な畑作地帯であり、生活の安定向上のためには、なんらか抜本的な対策を構えざるを得ないことを農家自身痛感していたこと、即ち、経営改善への旺盛な意欲が根本になっていることは勿論であるが、この主産地育成を外部から促進させた要因としては、a) 全国的な果樹ブームの波にのつた。

b) 附近に大集団産地をようする熊本県をひかえ、近代的主産地のありかたを見聞するチャンスに恵まれた。c) 県外先進地視察によつて、出水市内の広大な適地の存在を改めて認識し、大いに自信を深めた。

d) 栽培適地が矢管岳山麓の緩傾斜地帯によくまとまつており、かつ、その適地内に優良な既設園が点在し、新植農家の指標的役割を果たした。e) 市当局の適切な奨励施策が行なわれたことなどであり、これらが総合的に働いて樹園地造成を促進したのである。

逆に抑制的に働いた要因としては、a) 今後のみかん価格下落への危惧や、農協の経営事情などにより融資困難な場合があつたこと。b) 適地内に民有地が多いことと地価の上昇が烈しく集団的な土地取得が困難なことなどであつた。

### 2) 産地育成過程の特色

産地育成過程において、a) 植付けは全面的に計画密植方式によつて行なわれたこと。b) 早生温州の比率が極めて高いこと。などが技術的特色としてあげられる。

計画密植は未収益期間を短縮し、脱落農家を防ぎ、集団的な新植を容易ならしめる有効な手段として市も積極的に奨励したので、昭和32年以後の栽植は殆んど密植方式がとられ、従来の粗植園も補植して密植化された。

早生温州の比率の高いのは、第1に価格の良い点、その他労力の調節、普通温州との組合による収入期間の延長のできる点などが歓迎され、急激に面積がのびたためである。部落によつては早生6割、普通4割の比率を示しているところもある。

### Ⅲ 今後の展望と問題点

恵まれた立地条件を活かし、近い将来、出水駅附近を中心に、オートメ共撰場、加工工場をそなえた1,00

0 ha程度の近代的集団産地の造成を期しており、名実ともに出水地域の中核としてその発展が期待されている。

今後の問題点は次のとおりである。

#### a) 集団的規模拡大の困難性

民有地が多いため広大な適地を有しながら集団的な土地取得が難しい。民有地の効果的な開放策が何よりも望まれる。

#### b) 省力化対策について

現在までは、多くの農家が規模も小さく、労力不足を切実に感じなかつたのと、面積拡大を急ぐあまり省力化対策がやや看過されてきたきらいがあるので、今後は栽植方式の改善、園道の完備など、機械化を前提とした省力化への配慮が強く望まれる。このことが作業能率を高め、合理的な規模拡大へ結びつくことにもなる。

#### c) 甘夏の混植について

温州と甘夏は一応地域区分されているが、温州地帯にも甘夏が良くでき価格も良いので、労力調節、危険分散等の意味からも甘夏をとり入れる者が多く、現実に温州188ha中、約25ha程度の混植があるものとみられる。これは、栽培の処置によつて含核防止が困難な現在、温州主産地形成上大きな問題であるので、早急に実態を把握し、適切な処置がとられるべきである。

#### d) 協業化の推進

現在、当面の目標を1haに置いて一意規模拡大に専心しているためか、協業化への意欲が一部の地区を除いて低いように感じられる。

勿論、共同防除等はグループ中心によく行なわれているが、今後、土地の解放策とも関連して、更に進んだ協業経営形態の採用も考慮する必要がある。